

ゴーシュは町の音楽隊でセロをひく演奏家でした。けれどもあんまり上手でないという評判でした。上手でないどころではなく実は仲間のがくしゅの中では一番下手でしたから、いつでも楽長にいじめられているのでした。昼すぎ、みんなは楽屋にまるく並んで今度の町の音楽会へ出す第六交響曲の練習をしていました。トランペットは一生懸命歌っています。ヴァイオリンもつややかな音色で響いています。クラリネットもポーポーとそれを手伝っています。ゴーシュも口をりんと結んで目を皿のようにして楽譜を見つめながら、もう一心にひいています。にわかにはパッと楽長が両手を鳴らしました。みんなぴたりと曲をやめてしんとしました。楽長が怒鳴りだしました。「合っていないよ、ゴーシュのセロが遅れている。ここからやり直した。」みんなは今の所の少し前からやり直しました。ゴーシュは顔を真っ赤にして額に汗を出しながら、やっと今言われたところを通りました。ほっと安心しながら続けてひいていますと、楽長がまた手をパツとうちました。「セロッ。音が合わない。困るなあ。僕は君にドレミファの音階を教えている暇はないんだがな」みんなは気の毒そうにして、わざと自分の譜面をのぞき込んだり自分の楽器をはじいて見たりしています。ゴーシュは慌てて糸を直しました。これは実はゴーシュも悪いのですが、セロも古くなっていてずいぶん調子が悪いのでした。「今の前の小節から。はいっ。」みんなはまた始めました。